

鳥取市茶屋二区町内会えんがわ事業の意義と課題

発表者	えんがわ事業実行委員会	水川 侑也
共同研究者	阿部 沙耶乃、江本 菜穂、奥村 恵未	
	下村 大地、金澤 有紀、藤井 千夏	
	中村 千尋、船曳 潮、向井 麻里絵	
	廣澤 咲、山名 拓馬	

1. 問題提起

近年、日本国内における地域社会の弱体化や少子高齢化が叫ばれて久しい。地域経済の停滞や産業構造の変化は加速度的に進み、これが結果的に地方の人口流出につながり、都市部への集中化が進んでいる。そして、地方では少子化高齢化がますます深刻になり、悪循環が生まれているのである。

そして、このような悪循環は経済的な影響のみならず、地域社会の維持自体が困難な現状にある。過疎化による人口減少によって自治会が維持できない地域も増加している。そして自治会という住民組織の衰退は、人間関係の希薄化、いわゆる「ご近所付き合い」の減少にもつながっている。

これらの問題に対する懸念は誰もが抱いているものであろう。そして、こうした課題に気を揉むばかりでなく、解決策を住民自身が試行錯誤しながら追い求める取り組みは全国各地で見られる。NPO などの新しい公共が解決の担い手として着目される他方で、古くからの地域自治組織である町内会や自治会と呼ばれるコミュニティ組織は、地域社会の問題の解決に寄与出来ないのだろうか。しかし、自治会が維持できず、地域社会や人間関係の希薄化の進行により、現状のままでは町内会が地域社会の問題に寄与できるようになるのは難しい。

ところが、同じような問題を抱える鳥取市湖山町茶屋二区町内会では、筆者を含む鳥取大学生とともに、地域自治会の維持に向けて取り組んでいる。大学生が自治会に参画していく取り組みは、町内会の維持、ひいては地域社会の問題の解決に寄与できるひとつのモデルケースと成り得るのではないかと考える。そこで本報告では、鳥取市茶屋二区町内会の実践の意義や課題を整理し、自治会が学生を迎え入れたことによるその意義と、そこには何がもたらされているのか見当していくことを目的とする。

2. 研究の目的と方法

茶屋二区町内会が具体的に実践している「えんがわ事業」について、茶屋二区の現状や課題を整理し、そしてえんがわ事業が始まった経緯を整理していく。そして、今までのえんがわ事業の具体的な活動を追いながら、茶屋二区町内会の住民にもたらされたものや、他方で鳥取大学生にもたらされたものを、客観的に分析してみたい。

3. 茶屋二区町内会とえんがわ事業

茶屋二区町内会

茶屋二区町内会は、鳥取県鳥取市湖山町にある小さな自治会である。43 世帯、141 人が暮らしている。付近には飲食店や小売店が並び、また鳥取大学前駅にも近い。鳥取大学の学生が住むためのワンルームマンションも多く立ち並び、一見すると過疎とは無縁のように思われる。しかし、茶屋二区町内会の現状は、60 歳以上の人口が 42%を超えている。一方で、高校生以下の人口（0 歳から 18 歳）は、わずか 15%である。

えんがわ事業とは

上のような現状を踏まえ、鳥取大学生と協力して「えんがわ事業」を進めている。えんがわ事業とは、公民館を拠点に地域住民と大学生が協同して季節ごとの行事を企画し、住民同士、住民と大学生同士の交流の場を創出する、茶屋二区独自の活動である。

公民館建て替えを機に、公民館に「相互扶助的な機能」を持たせたいと、地域住民が鳥取大学に相談したことで、鳥取大学生との交流が始まる。そして、呼びかけに応じた大学生、鳥取大学地域学部の有志 12 名が、「えんがわ事業実行委員会」を組織し、運営にあたっている。毎年、七夕祭りや月見会、祭礼の補助などの行事を担い、また鳥取大落語研究会や茶道部等を招き交流もはかっている。

茶屋二区えんがわ事業の意義

(1) 町内会側の評価

- ・学生を取り込んだことで、消滅しかけていた地域行事の維持、新たな行事の創出
- ・お年寄りが参加する場、家から出てきて他の人と接することのできる場の創出（安否確認）
- ・いつもひとりなので、皆さんと一緒に食べたりするのは楽しい（地区在住女性）
- ・気持ちが若返る（地区在住女性）
- ・いつもは孫や家族と接するのみの生活だが、20代の人と接することは嬉しい（地区在住女性）
- ・病気をしがちだった方が、学生と接する最中に「学生の将来の夢」を聞いたことで、自らもまだ頑張れると思えるようになった（地区在住男性）
- ・町内会総会出席率の増加

(2) 学生側の評価

- ・学生だけではふだん行うことのできない貴重な体験
- ・大学やアルバイト先だけだった生活から一転し、茶屋二区町内会を心地よい空間
- ・自らの心の拠り所
- ・ひとり暮らしにも関わらず、身近に親のような存在

(3) ソーシャルキャピタルの形成

3年間にわたる活動の積み重ねによって生み出されたものは、学生と地域住民相互の「信頼関係」である。そして、地域住民と大学生が信頼関係を形成していった結果、そこには「社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）」が形成されたといえよう。「社会関係資本」とは、宮川公男（2004）によると「広く、人々がつくる社会的ネットワーク、そしてそのようなネットワークで生まれる共有された規範、価値、理解と信頼を含むものであり、そのネットワークに属する人々の間の協力を推進し、共通の目的と相互の利益を実現するために貢献するもの」と定義されている。

高齢化率が甚だしく、少子化も進み自治機能が低下しつつあった茶屋二区町内会において、大学生が入ることで新しいネットワークを築き、それが自治機能の向上につながっていったのである。また大学生と町内会という単純構造ではなく、鳥取大のサークル活動やマスコミ、他地域のNPO等ともつながっている。

それは、先に述べた茶屋二区町内会が目指す「相互扶助機能」にすでに結びついているものであると考える。

4. えんがわ活動の課題と今後の抱負

- ・茶屋二区内に住まう学生の参加がほとんどないこと

現在参加している学生は、えんがわ事業に興味を持ち参加した有志ばかりである。県外出身者は多いものの、茶屋二区内に居住している学生はいない。茶屋二区外に住む学生だと、地震や火事などの災害時への対応は難しい。

- ・後継者の獲得

現役の実行委員会メンバーが卒業した後、えんがわ事業自体が消滅してしまう恐れがある。実際、行事の減少が見られる。新入生を獲得し、運営メンバーとして育成していくことが必要である。

それでも、大学に隣接しているという好条件は今後も変わることはない。今後は、広報活動や勧誘活動を積極的に行い、さらには「日常的な支援」ができる方法を模索していきたい。